古代における語根の用法

―修飾法を主として―

此島正年

一、語根の連体法
二、語根だけの連用法
三、「語根プラスに」の連用法
四、語根が「に」以外の辞を伴う連用法
五、後世との関連

一、語根の連体法

古事記・日本書紀・万葉集や祝詞・宣命等の古代文献を見ると語がまだ形式的に十分な発達をせず、語根そのまゝの形で用いられているばあいの著しく多いことに気づくのである。今少し例を挙げると、（古事記の歌は「記紀歌謡集」の番号を、万葉集の歌は巻数の下に「国歌大観」の番号を、祝詞はたゞちにその名を、宣命はたゞちに「歴朝詔詞解」の番号を「第〇詔」と記す）

(1)登与美岐〔豊御酒〕（記上・六）宇豆毘古〔珍彦〕（記中・神武天皇東征）伊都加斯〔厳橿〕（記下・九三）美豆多麻宇岐〔瑞玉盃〕（同・一〇一）由庭〔斎庭〕（出雲国造神賀詞）醜事（第一七詔）常処女（万一・二二）左射礼浪（万十二・三〇一二）伊佐左村竹（万十九・四二九一）毛呂比登〔諸人〕（万五・八四三）

(2)志豆延〔下枝〕（記中・四四）卜事（竜田風神祭）蟲物（六月晦大祓）顕事（出雲神国造賀詞）武都事〔睦事〕（第八詔）多波許止〔戯事〕（第五一詔）

(3)斗目〔鋭目〕（記中・一八）斗迦麻〔利鎌〕（同・二八）阿佐士怒波良〔浅篠原〕（同・三六）阿多良須賀波良〔可惜菅原〕（記下・六五）世の那賀比登〔長人〕（同・七二）太前（祈年祭）荒妙（同）草深野（万一・四）

(4)網引・網子（万三・二三八）水渋（万八・一六三四）於能豆麻〔己妻〕（万十四・三五七一）

右の中(2)の例は「しづむ・うらふ」等の動詞に、(3)の例は「と

し・あさし」等の形容詞に、(4)は「あみ・おのれ」等の名詞・代名詞に発展するが、本稿は(1)を主に扱って行く。

「とよ・うづ・いつ・みづ・ゆ・しこ・とこ・さゝれ・いさゝ」等、すべて名詞の上についてそれぞれの意義を添えており、今の語感でいえば、下の名詞と一体になっていわば接頭辞的な用法であるが、しかし今の接頭辞の概念にぴたりとあてはまるものではなくて、一面かなりの単語性を持っているようである。もっともこれは語によって多少の相違があり、中にはすでに長い間の慣用で熟合の強いものもあるようであるが、しかしそれにしても、今のわれわれが感じるよりもはるかに上下の熟合の度はゆるく、すなわちこれらの語の使用意識において語根を修飾語として下の名詞へ結びつけて用いているように思われる。このことを形態的に証明するものとして次のような用法を見ることができる。

(1)由都麻都婆岐〔斎つ真椿〕(記下・五八)湯津磐村〔斎つ岩群〕(祈年祭)常都御門(万二・一七四)之許都於吉奈〔醜つ翁〕(万十七・四〇一一)

(2)宇豆能幣帛〔珍の幣帛〕(祈年祭)瑞能御舎(同)伊頭乃千別〔厳の道分〕(六月晦大祓)豊乃明(第四六詔)醜乃益卜雄(万二・一一七)

すなわちこれらの用法では、語根が単独ではなく(1)助詞「つ」(2)「の」によって下へ連続しており、むしろ単語の意識で用いられている。このような用法が語根だけの用法と並行して一方にあるということは、これらの語根が接辞としてよりもむしろ単語としての性質を豊かに持っていることの証明となるであろう。

もっとも、語根だけの用法と助詞を介する用法とは、同一古典に並行して見られるとはいゝながら、その間に形式としての新古の差は認めなければなるまい。すなわち、語根だけの用法は比較的古い形式であり、連体助詞「つ・の」によって下へ続くのは新しい形式というべきであろうし、なおまた助詞によるものでも、「つ」を用いるのは古く「の」は新しいという差があるようである。(山田博士「奈良朝文法史」新版四一七頁参照)。

ちなみに形容詞語根にも連体助詞を介するものがある。例えば遠都神祖(万十八・四〇九四)遠乃朝廷(万三・三〇四)等保能久爾〔遠の国〕(万十五・三六八八)

二、語根だけの連用法

以上は語根が体言を修飾するばあいであるが、用言を修飾する例も少くない。

(1)伊夜佐夜斯岐己〔弥清敷きて〕(記中・二〇)葛佐波麻岐〔多巻き〕(同・二四)登余本岐〔豊寿き〕(同・四〇)宇多陀怒斯〔転楽し〕(同・四一)騰遠依〔撓寄る〕(万二・二一七)常目頬次吉(万十一・二六五一)草葉母呂武吉〔諸向き〕(万十四・三三七七)真楫之自奴伎〔繁貫き〕(万十五・三六一一)髣髴聞而(万十六・三七九一)之婆奈久〔屢鳴く〕(万十七・三九七三)

(2)多迦比迦流〔高光る〕(記中・二九)伊多那加婆〔甚泣かば〕(記下・八四)高知(祈年祭)太知立(同)広知立(春日祭)大坐々而(第三詔)早還許年(万一・六二)

(2)は形容詞の語根で、これを前述の連体的用法と併せ見る時（例えば「太前」と「太知」）、こういう語根だけの原始的用法から形容詞が発達したことがわかるが（その発達の過程には連体のばあい前記の「遠つ・遠の」のような形もあったわけ）、これは今別にして、(1)を見ると、「さや・さは・とよ・うた・とを・とこ・もろ・しゞ・ほの・しば」等の語根が用言に続いてそれぞれの意義を添えているのは、連体のばあいと同様に、接辞的であるが、やはり単語性の強いことを認めなければならない。なお、この中には「とよ・とこ・もろ」のように連体・連用両法を兼ねるものもあり、前述形容詞語根が両法を兼ねるのと並んで、古代における語根の融通性をよく示している。名詞に接頭して「神漏伎・神奈備」となり、用言に接頭して「神留・神左夫」のように用いられる「かむ」なども、名詞「かみ」の転用というよりも、むしろこのような語根的形態が先で、これから名詞「かむ」乃至「かみ」を派生したと見るのが、真に近いのであろう。こんなことは数詞にも考えられるのであって、「九夜・十日」のように名詞に接頭する用法の一方に「み谷布多和多良須〔二亙らす〕」（記上・七）「那々由久〔七行く〕処女ども」（記中・一六）のように動詞に接頭する用法があり、このような語根から次第に名詞としての数詞を生み出して行ったものと思われる。

さて、連体的語根がそれだけで使われる一方に助詞「つ・の」等を介しても用いられたのに対して、連用的語根は主として助詞「に」によって修飾法に立つ形を一方に持っている。以下節を改めてこれを述べよう。

三、「語根プラスに」の連用法

前に挙げた連用的語根から例をとると、「さは（多）・さや（清）しゞ（繁）」等が、一方に助詞「に」を伴って

人佐波爾来入りをり（記中・一一）せなのが袖も佐夜爾振らしつ（万十四・三四〇二）竹珠を之自二貫き垂り（万十三・三二八六）

のように用いられる。この種の「語根プラスに」の用例を少し挙げよう。

阿夜爾（註一）な恋ひきこし（記上・四）多陀爾（註二）〔直に〕会はむと（記中・一九）都毘邇〔終に〕知らむと（記下・七四）多斯爾〔確に〕は率寝ず（同・九二）能杼爾波〔長閑には〕死なじ（第一三詔）大舟の由多爾あるらむ…（万十一・二三六七）色別爾見し明らむる（万十九・四二五五）心も思怒爾（註四）古思ほゆ（万三・二六六）足玉も手玉も由良爾織るはたを（万十・二〇六五）

＊（註一）この「あや」は一方に感動詞ともなり、また形容詞「あやし」の語幹でもあろう。

（註二）この「ただ」が一方で「妹が多太手ゆ」（万十四・三四三九）「利根川の川瀬も知らず多々和多里（同・三四一三）のように、それだけの連体・連用法を持つ。

（註三）「異手枕」（万十一・二四五一）は語根だけの連体法。

（註四）以下「しの・ゆら」は一方に動詞「しのふ・ゆらぐ」の語幹でもある。

なお次のようなのは、形容詞語根が「に」を伴って連用法に用いられた例である。

放保爾（大に・凡に）見しかば（万二・二一九）久爾あらなくに（同・二三二）いや遠爾里はさかりぬいや高爾山も越え来ぬ（同一三一）いや高爾いや広爾……立栄えしめ仕へ奉らしめ給へと（平野祭）

すなわち、形容詞が連用形「――く」で連用法に用いられるようになるまでには、前述の語根だけの用法や、このように「に」を伴う形式があったわけである。

以上は語根にただちに助詞「に」の接する形式であるが、これが一段進んで、語根もしくは語根の末音を重複して「に」に続ける形式や、更にはまた語根に種々の接辞をつけて「に」に続ける形式を発生させるにいたる。

(1)佐和佐和邇汝が言へ せこそ…（記下・六四）多志陀志爾率寝てむ後は（同・八〇）都良都良爾見つつ思ふな（万一・五四）佐良左良爾何ぞこの児のここだかなしき（十四・三三七三）波漏波漏爾思ほゆるかも（五・八六六）宇良宇良爾照れる春日に（十九・四二九二）高々爾来むと待ちけむ…（十三・三三七）

(2)都思美弥爾里家はさはにあれども（万三・四六〇）朝霧に之怒々爾濡れて（十一・八三一）白檀の枝も等乎々爾雪の降れれば（十二三一五）玉も湯良羅爾白妙の袖振る見えつ（十三・三二四三）小舟乗り都良々爾浮けり（十五・三六二七）

(1)は語根を重ね、(2)は語根の末音を重ねて「に」に続ける形式で共に重複によって表現を強める心理からできたものであろう。

語根と「に」との間に接辞を入れる形式には、次のようなものがある。

麻都夫佐爾とり装ひ（記上・五）宇麻良爾きこしもちをせ（記中・四九）昼は之弥良爾（万十三・三二九七）岩も等杼呂爾落つる水（十四・三三九二）

等は「さ・ら・ろ」等の接辞が語根についたもので、これらの接辞は語根をほぼ体言化するような性質のものではなかったかと思われるが、この種の接辞で最も多く用いられしかも後世まで勢力のあったのは「か」である。

髣髴谷裳見えぬ思へば（万二・二一〇）伊佐左可爾思ひて来しを（十九・四二〇一）君が上は左夜加爾聞きつ（二十・四四七四）我子に佐太加爾…授け給へと（第五詔）静加爾あらしむるには（第九詔）

この「か」は、指示詞の「か」に通じ、上の語根を強く指示して下の「に」へ続けるものではなかったかと思われ、前の「さ・らろ」等に更について「――さかに・らかに・ろかに」等の形式をも作った。例えば

四方の食国の年豊かに年倶佐加爾得たりと見賜ひ（第五詔）あまの楫音湯鞆干（万十二・三一七四）都婆良可爾今日は暮らさね（十九・四一五二）於保呂加爾心つくして思ふらむ（十九・四一六四）

＊（註）後の「むくむくと」の「むく」で、物の盛んなことを

言う語根であろう。

これと同種の形式に

紫の綵色のかづら花八香爾今日見る人に（万十二・二九九三）爾

故余漢吾と笑まして（十一・二七六二）

のような「——やかに・よかに」の形がある。この「や・よ」という接辞は間投助詞のそれと関係があるように思われるが、ともあれ、この形式、特に「——やかに」は後になるほど多く用いられ、平安朝の文章には「あてやかに・こまやかに・若やかに・あざやかに・さはやかに・まめやかに」等の語がしきりに見られる。

以上、語根が単独で、あるいは重複したり、また「さ・ら・ろ・か・さか・らか・ろか・やか・よか」等の接辞を介して助詞「に」に連なり、連用修飾法に立つのを見たのであるが、「に」と並んで連用修飾語を作る助詞「と」によって語根が連用法に立つ例は、古代にはきわめて少い。次はその少い例である。

真木の板戸を等杼登して吾が開かむに（万十四・三四六七）由久遊久登恋痛し吾背（二・一三〇）

「とどと」は「とどろに」と同根であり、「ゆくゆくと」は、一方に前述の「ゆくらかに」や、また「ゆくらゆくらに」（由久良由久良耳面影にもとな見えつつ〔十九・四二一〇〕）とあるのと同根である。語根プラス「と」の形式が連用法に多く用いられるようになるのは、後述のように平安朝に入って、しかもその後期からである。

（附記）本節で述べたことは、かつての拙文「助詞に・との相関」〔国語学・第十一集所載〕の内容とかなり重複しているが、論を進める必要上これを避けなかった。

四、語根が「に」以外の辞を伴う連用法

以上は、古代の語根が助詞「に」によって連用法に立つばあいを挙げたのであるが、語根が連用法に立つには、実は必ずしも「に」によらなくてもよかったのである。その一つ、「と」によるばあいは先程触れたが、そのほかにも

綿佐波太入りなましもの（万十四・三三五四）許々陀も紛ふ梅の花かも（五・八四四）

等の「だ」がある。右の例では語根「さは・ここ」について用いられ、古い連用格の助詞であったらしく、これについてはすでに小林好日博士の説がある（「古格の助詞と万葉集の『もとな』『さはだ』」〔「国語学の諸問題」所収〕）。万葉時代すでに古い助詞であったことは、「ここだ」が一語化して一方に「ここだく」と接辞「く」（形容詞連用形語尾の「く」と同源であろう）をとって用いられたり、更にまたこの「ここだく」が一語化して「に」を伴うようにもなっていたことから、考えられる。

許己太久も繁き恋かも（万十七・四〇一九）許己太久爾君が見せむと吾をとどむる（十八・四〇三六）

この「だ」が「な」にもなるとして、副詞「もとな」に新説を加えたのが、前記小林博士の論文であるが、これはなお検討を要すると思う。それよりも私は、むしろ「だ」と同じものに「ば」

という辞のあったことを挙げたい。

心に乗りて許己婆(ここば)かなしけ（万十四・三五一七）神からや曾許婆(そこば)たふとき（十七・三九八五）

もっともこの「ば」は用例が「だ」よりも更に局限されて一段と古いものであったらしい。「ここだく」と同様「ここばく」という形も見える（許己婆久も見のさやけきか（十七・三九九一）。

小林博士は副詞「もとな」について「もと」を「あまた」の「また」と同じものとし、それに副詞的接辞「な」のついたものと考えられたのであるが、「もとな」は別問題として、「あまた」を「あプラスまた」とせられたのはどうであろうか。私はやはり「あまた」は「あまプラスた」で、「あま」は「あまねく」と同根とし、「た」をやはり古い副詞的接辞と考えたい。前に挙げた古事記の「うた楽し」の「うた」にこの接辞の附いたのが「うたた」であろう（もっとも「うたた」を、前に述べた、語根の末音の重複の類と考えることもできるが、末音重複のばあいは「に」を伴うのが普通であるから、従いにくい）。

五、後世との関連

以上は、古代語において語根が、あるいは単独で、あるいは「の・に」等の助詞を伴って修飾語になる状態を述べたのであるが、これが平安朝以後になってどのように継続しあるいは発展したかを略述して、本論文の結としたいと思うのである。

語根だけの用法は、平安朝以後になるとさすがにその用例が局限されて来る。

(1)しづ心（古今・二）ささ れ石（同七）こと(異)人（土佐日記・十二月二十六日）ささ れ浪（同・二月十一日）あて人（帚木）まめ人（夕顔）なま侍・なま学生（大鏡・序）

(2)顔をもほの見せ給はず（夕顔）ほの好きたるすぢの心（初音）なまけやけし（同）なま隠すけしきなれば（手習）

右は平安朝の仮名文から少い例を挙げたのであるが、しかしこれらの用法もやはり、今のわれわれが接頭辞と感ずるほどには固定していないように感じられる（例えば、「なま」が連体・連用両法にかなり自由に用いられているように）。

ともあれ、語根だけの用法の少くなることは、一方に「語根プラス助詞」の用例の増加と関連する。同一語根が助詞「の」を伴って連体的に、「に」を伴って連用的に用いられる例、例えば「くさぐさの・くさぐさに」「うつつの・うつつに」「つひの・つひに」「むげの・むげに」「まれの・まれに」「とみの・とみに」「さすがの・さすがに」等の用法の少くないことは、かって触れたことがある（拙文「形容動詞の連体法」国学院雑誌・五四の三）。特に「に」を伴う連用形式は平安朝に入ってその用例きわめて多く（例えば「ほの」が「ほのかに」、「まめ」が「まめに・まめやかに」、「あて」が「あてに・あてやかに」と発展する）、しかもその用法が本来の修飾法から発達して、もともと含み持っていた叙述性を著しく増し、ここに「あり」と結合して、「ほのかなり・まめやかなり」のようないわゆる形容動詞に転身するのである。そうしてその活用体系の中において、もとからの「――に」はその連用形に位置することになるが、とすれば同じくもとの「――の」はその連体形に残存してよいはずである。かくて、形容動詞の連体形が主として「――なる」（現代では「――な」）

の形で用いられる中に、今なお「——の」の形であらわれる語が少くないのである（例えば「わずかの・にわかの・いささかの」のように）。特に漢語を語幹とする形容動詞にこれが多いのは（例えば「別の・急の・特別の・無益の・内密の」のように）、古代からの「語根プラスの」という連体形式に、中世以来激増した漢語があてはめられたからであって、このようなことを取扱ったのが前記の拙文「形容動詞の連体法」であった。

さて、このように「語根プラスに」の形式が用言に発展する一方、この古代の形式に代るものとして平安朝以後発達した語根の連用形式に「——と」がある。これは、前述のとおり古代にはあることはあってもその用例がきわめて少いが、平安朝中期頃から次第に増加して来るのである。

うららと照り(註)て（土佐日記・一月二十九日）足音ひしひしとふみ鳴らしつつ（夕顔）ほのぼのと明けゆくに（初音）あなをかしげとふと見えて（同）扇をつとさし隠し給へり（枕草子・春曙抄九三段）そよろとさし入るるはくれ竹の枝なりけり（同・一二二段）ほろほろと泣かせ給ひけるこそ…（大鏡・三条院）つぶと動きもせず（同・伊尹）さめざめと泣きければ（沙石集・六）はらはらと物の鳴る音す（同八）はるばると思ひ立ちて来たり（同）文殊楼の軒端の白々として見えけるを（平家物語・二）きと院の御所へ参れ（同）しゃ面をむずむずとぞ踏まれける（同）ちとも色を変ぜず（同）こまごまと申して（同）波にも洗はれずあざあざとしてぞ見えける（同）

来る。前述の「はろばろに」「高々に」等も同じで、後世ならば「はろばろと」「高々と」の形であらわれる。

平安後期から鎌倉に入ると、煩にたえないほどであるが、この形式ですぐ気がつくのは、同一語根を重ねて「と」のつくのが大部分であることである。

この形式が状態性の意義の漢語に適用されて出来たのが「堂々と・断乎と」等の類である。この種の語は、平安朝では勿論仮名文には見られないが、漢文訓読文でもこれが多くなるのは中期以後であり、(註)この点前述の国語における状況と符節を合せているのは注意してよい。

＊（註）春日博士「金光明最勝王経古点の国語学的研究」一六六頁以下によると、後には「——と」であらわれるはずの語がすべて「——に」の形で見えるとして「忽然に・泰然に・虚然に・端然に」等を挙げておられる。なお遠藤博士「訓点資料と訓点語の研究」一八三頁以下参照。

＊（註）古代には前述のように「うららうらに」という形で出てたゞ注意すべきは、「漢語プラスと」は更に進んで「あり」と結合していわゆるタリ活用の形容動詞になったが、「国語々根プラスと」はこのような発展をしなかったことである。「はるばるとある野の来し方も見えず」（宇治拾遺・一）のように「あり」と共に用いられる用法も無いわけではないが、きわめて少く、「国語々根プラスと」はおしなべて修飾法に立つのが普通だったのである（土佐日記・二月五日の「松原目もはるばるなり」なども古形「はるばるに」からおのずと出来たナリ活の語とも考えられるが同書にすでに「うららうらと」というような語のあるのを見ると、やはり「はるばると」はすでにあり、これを用言化するの

に強いてナリ活用にしたものと解すべきであろう)。

(一九五六年三月)

(追記)「国語学」第二十四集所載、阪倉篤義氏の「文法論の課題」に、拙論と関係のある部分を拝見した。すなわち、古代の「大(おほ)ます」のような形式は、語根「大」が動詞「ます」に係っているのでなく、「大ましにます」の省略形で、「大」は「まし」という居体言(連体形の体言化した語)に係って「大まし」という複合体言を作り、この体言が助詞「に」によって下の「ます」へ連用修飾として続いているのだとし、「豊寿き寿きもとほし」(記中)の「豊(とよ)」も、「豊寿きに寿きもとほし」の省略形であるから、やはり連体法に立つものであると説かれるのである。(拙文ではこの「おほ・とよ」を連用修飾法とした)。傾聴に値するお説ではあるが、しかしもしこれが、語根(阪倉氏はこのばあい接頭語と称しておられる)はすべて連体的に用いられるものであるという一般論に発展するのであるならば、にわかに賛成はできない。私の挙げた例で明らかなように、連体的に用いられるもの(これが多いことは事実だが)もあれば、連用的に用いられるものもあり、更には両用法を兼ねるものもあるのであって、すべてを「大ましにます」式にかたづけることは無理である。

—弘前大学助教授—